世界の窓①

第38回国際社会学機構世界会議参加記

レギュラーセッション‘Archives,Accountability,and Democracy in the Digital Age’を終えて

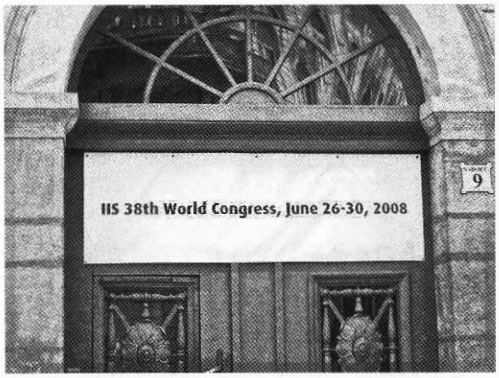
高野山大学　藤吉　圭二
Keiji FUZIYOSHI

はじめに

去る2008（平成20）年6月26日（木）～30日（月）の5日間にわたり、ハンガリーのブダペストにある中央ヨーロッパ大学（CEU）において、第38回国際社会学機構世界会議（以下「世界会議」と略記）が開催された。この世界会議で、筆者は数名の仲間と共にレギュラーセッションを設けた。‘Archives,Accountability, and Democracy in the Digital Age’というタイトルで設けたこのセッションには、筆者と共に日本から参加した3名の仲間に加えて、アメリカから1グループ、ノルウェーから1名のエントリーがあった。

開催までの流れは次のとおり。まず事務局よりセッションの募集があり希望者はどのような内容でセッションを開きたいか、その概要をまとめて応募し、書類審査を受ける。それにパスした希望者は正式にセッション開催責任者となり、あらためて「このようなテーマでセッションを開くので、参加希望者は報告内容の概要を送ってほしい」という趣旨の呼びかけ文を作成し、広く報告者を募る。これらの手続きはすべてウェブ経由（電子メールやPDFファイルのウェブ公開）で行なわれる。筆者はこの世界会議に初参加だったが、にもかかわらず一面識もない海外の研究者からエントリーを得られたのは、こうしたウェブベースの募集システムのおかげである。

筆者は現在、「オーストラリアと日本の自治体における業務記録管理システムの比較研究」というテーマで科学研究費補助金（基盤(B)）による共同研究を進めている。これは、オーストラリア・ヴィクトリア州の公文書館（Public Record Office Victoria）が推進する電子記録管理の戦略 VERS(Victorian Electronic Records Strategy)に関する、現地調査を中心とした共同研究である。今回の世界会議参加は、その成果を国際的な学会で報告し、この領域に対する海外の社会学研究者の関心や反応を確かめること、および、海外の研究者との共同研究の可能性を探ること、以上2点を主たる目標として計画した。



CEUの正面に掲げられた世界会議の横断幕

VERSには、コンピュータとインターネットの時代にあって電子記録の真正性と利便性をいかに適切に確保していくのかという、どちらかといえば実践的な関心からのアプローチで出発したのだが、そこから多様な関心をふくらませることが可能だった。第一に、政府の内部において電子ベースで記録管理を標準化するということは、それまで機関や部局によって様々な「個性」を持っていたにちが

いない記録の取り方・残し方に関する「作法」をかなりの程度まで一律化することにつながる。これは、部署によって様々であり得たスタッフの働き方にも影響を及ぼすに違いない。第二に、保管された記録は業務遂行の適切性を組織内外に証明するための貴重な資料となるが、それが電子化され、ウェブ経由でアクセス可能なものとなれば、特に組織が公的な自治体などであれば、ステークホルダーたる住民の関心も高まり、一方で、その目を意識した記録管理がなされる可能性も高まることが予想される。第三に、地域の記録が蓄積されていけば、それはおのずと地域のアイデンティティを支える、少なくともひとつのよりどころとなりうる。記録と記憶は、時に密接に結びつく。社会（共同体と置き換えてもいいが）と記憶、あるいは社会の記憶は、社会学の観点から興味深いテーマと言える。

いま、記録に関して組織の内部、組織と外部、そしてさらに広い社会というように同心円的な関係となるようにテーマを並べてみた。この同心円的な関係は、別の見方をすると日常の業務遂行に対する記録管理の影響、一定の業務単位が完結した時点での業務遂行の見直し、業務の蓄積の上に生成される歴史というように、時間的に見て短いスパンから長いスパンへと並べることも可能だ。蓄積される記録は、それを軸として人々の営みの様々な側面を照らし出す素材となりうる。

これ以外にも記録については考察すべきテーマがあり、それらは上記のものも含め今回の各報告のテーマでもある。以下、簡単に報告のそれぞれをご紹介したい。なお各報告は英語で行なわれたが、ここでは仮訳とする。

1 セッションでの報告

報告1：ナレッジマネジメントとレコードマネジメントの間にあるギャップ

報告者は磯村和人氏（中央大学大学院国際会計研究科）。経営学の立場から次のような報告をされた。ナレッジマネジメントとレコードマネジメントの間にはギャップがある。前者は技術革新と効率化への寄与を目的とし、後者の目的は主として証拠保全であり、これが組織の戦略的な方面に利用されることは稀であるということが、すでにレコードマネジメント研究では指摘されている。こうしたギャップを調整することで、ナレッジマネジメントとレコードマネジメントの連携も可能となる。この連携のあり方は、組織の目的や特性によっても左右され、典型事例として国内外のいくつかの企業を比較検討する。

報告2：日本の中央および地方政府における記録管理と組織文化

報告者は水垣源太郎氏（奈良女子大学文学部）。社会学の立場で日本の行政マンへの集中的インタビューの経験を踏まえ、日本における行政記録の管理の問題を、その意思決定システムの問題と関連させ、次のような報告をされた。日本では行政記録の保存管理が立ち遅れているという見方は、ある意味では妥当でない。ここで注目すべきなのは稟議制というシステムである。稟議制において作成される文書（稟議書など）は、必ずしも意思決定の責任の所在を証拠だてるものではないという点が重要だ。特に戦後日本の官僚制は記録管理において十分とは言えないにもかかわらず極めて活動的であったが、ここで稟議制の果たした役割を再認識する必要がある。一般に組織は、組織効率の追求と成員の意欲喚起という相反する要求を同時に満たさなければならないが、それを日本の官僚制において調整していたのが稟議制だという説明が可能だ。これと日本の官僚制における人事システム（キャリア組と現場組の別枠採用・昇進システム）との相乗効果が、戦後日本の官僚制を、その「貧弱な記録管理」にもかかわらず強力な政策推進集団としてきたのである。

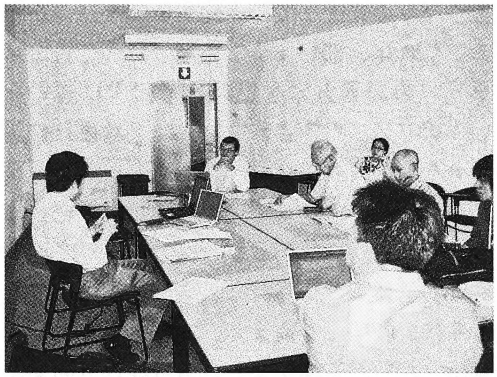
報告3：近代社会におけるアーカイブズと再帰性

報告者は安倍尚紀氏（東京福祉大学教育学部）。イギリスの社会学者アンソニー・ギデ

ンズの「社会の再帰性 reflexivity」という概念の検討を通じ、次のような報告をされた。ギデンズのいう「再帰性」からは2通りの含意を読みとることができる。ひとつは「行為の再帰的なモニタリング」という意味での再帰性であり、これは個人内部のメカニズムとして存在する。もうひとつは「社会的な再帰性」である。これは、われわれが社会のなかで生きていく際に膨大な量の情報にさらされ、それに意味づけを与えていかなければならないというあり方を意味する。このような「再帰性」の概念を踏まえてアーカイブズの社会的な意味づけをすることが可能である。

報告４：ライオンが自前の歴史家を持たないうちは：DIVA（Digital Information Virtual Archive）とサバルタンの歴史をアーカイブする試み

報告者はクリストファー・ベティンガー Christopher Bettinger 氏（サンフランシスコ州立大学）。社会学、特にマイノリティ研究の立場から、弱者からの情報発信という視点で情報コミュニティを作り上げていく取組みについて次のような報告をされた。「歴史とは国家の記憶である」というヘンリー・キッシンジャーの言葉は、国家の力とそこでの主流派的言説との関係に対して我々の注意を喚起する。アカデミックな研究が国家のなかでの主流派的言説の創出に一定の役割を果たすということもまた、しばしば指摘されている。アーカイブというものを考えるにあたっては、少なくともこうした力の偏在を意識したかたちでその概念を再考する必要が社会科学にはあるとも言われている。この考えを実際に適用するにはいくつかの方法がある。この方法を適用したものとして、サンフランシスコ州立大学は DIVA を設立し、これまで通常は歴史的な記録には登場することのなかった一般の人々のためのオンラインのアーカイブシステムの提供をめざしている。そこでは、マイノリティの人々によって、みずからの存在を「記録に残す」活動が営まれることになる。



セッションの様子

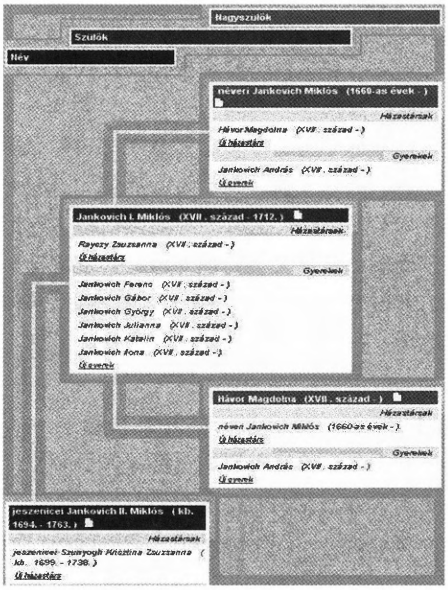
報告５：技術、民主制と、取扱い注意情報のデジタル化：住民を把握する方法

報告者は Gunhild Tondel 氏（ノルウェー科学技術大学）。残念ながら都合により当日の報告はキャンセルとなってしまったが、福祉社会における個人情報保護という視点から次のような興味深い報告が予定されていた。ノルウェーで近年開発された「健康とケアに関する個人別統計」は、ノルウェー語の頭文字をとって“IPLOS”と呼ばれる。この統計について論争が続いている。行政職員は IPLOS によって地方の公的支援を申請したり享受したりする人々について、個別にその身体的機能レベルを登録しているが、政府はこれを、基本的には中立的な計算装置にすぎず、公的支援の適切な運用に IPLOS は不可欠なものと主張する。その一方で、その有効性や信頼性に疑問の声もあがっている。また、本人の承諾なしにこうした情報が収集されることに対しても疑義が呈されている。取扱い注意情報のデジタル化が地域住民と政府との関係をどのように変容させるのかを考察する。

以上４本の報告のあと全体を通じたディスカッションを行なった。幸い、報告に立った日米両チームだけでなく、複数の国から来聴者を得て初対面の者同士で突っ込んだ議論をすることができた。

2 ハンガリーの歴史とアーカイブズ

ブダペスト滞在中、自分たちの報告の準備や他セッションの聴講などの合間を縫い、半日ほどの短い時間ではあったがハンガリー国立アーカイブズ（NAH）を訪問し館内の案内を受けることができた。また他にも記録と記憶にかかわって興味ぶかい施設の見学もできた。以下、簡単に触れておきたい。



家系図作成サイトの三世代表示画面

NAHは18世紀半ばに設立され2006年には国内外の関係者を招いて設立250周年の記念式典を開催している。館内廊下の壁面には歴史的な場面が時代ごとに描かれ、それを見ていくと大ハンガリーの栄光ある歴史をたどることができる。また階段踊り場の窓上部にはステンドグラスで諸都市の紋章（crest）がはめ込まれていたが、案内してくださったアーキビスト氏の「ここは今はハンガリーではありません」という紹介は、かつてハンガリーがいかに大国だったかを感じさせた。

そのNAHで大変おもしろい取組みが進められている。欧米圏のアーカイブズ利用では歴史研究者を除くと一般の多くが「ルーツ探し」を目的としているとはよく耳にすることだが、NAHでは積極的にそれをサポートしている。利用者登録をすればウェブ上で自分の家系図を作成することができるのである。国境の変動で親族や家族が音信不通になることも多かったという事情が背景にあるようだ。都市部はともかく今なお全体としては人口の流動性の低い日本との状況の違いは明らかだろう。

利用者登録は次のようにして行なわれる。まずメールアドレスとパスワード、姓名、称号や肩書き、性別、出生の日付と場所を入力する。その情報をNAH所蔵の住民情報と照合し確認されたら正式のユーザとして認証され、家系図作成が可能となる。家系図には次のような3通りの表示方法があり、いつでも好みによって切り替えることができる。

（1）「個人データ」モード：ここには自分の近況や家族構成だけでなく家族写真のような画像データも載せることができる。（2）「三世代」モード：ここでは自分を起点に両親・祖父母まで三世代が表示される（左図）。使用言語の変化などによって生じた姓名表記の変遷が一覧できるのは面白い。住所の移動だけでなく統治国家の変遷も頻繁な地域では、こうしたトレーサビリティが「ルーツ探し」に不可欠なのだろう。（3）「家系図」モード：自分の望む世代・親等までの親戚を選べば家系図が自動的に作成される。作成された家系図は画像として保存でき、たとえばパソコンの壁紙にもできるという説明がある。

オーストラリアでの調査の際にも、アーカイブズの一般利用者の目的の多くがルーツ探しだという話をよく耳にした。あらためて考えてみれば、オーストラリアは移民によって一度ルーツから切断された人々が暮らす国であり、今回訪問したハンガリーをはじめ多くのヨーロッパ諸国は、戦争など事あるごとにルーツ切断や一家離散、さらには自身の生命の危機にさらされてきた歴史を持つ人々が暮らす国である。連絡の途絶えた親族の手がかりを得ようとするのは地域にかかわらず自然な感情と言っていいだろうし、そこで頼りにされるのが公的なアーカイブズであるというのも、ある意味で納得のいくことだろう。

いま公的なと記してしまったが、家系図の基盤となる住民情報は必ずしも行政機関単独で作成されたものとは言えない。もとをたどればキリスト教会での出生・洗礼の記録があり、それをNAHが保存していたからこそ、この取組みに結びついたのだろう。

3　ついこのあいだの出来事

私たちは歴史を持っているという言い方はあまりに素っ気ない。少なくとも、私たちは次の世代に伝えるべきことを「歴史」として持っているというくらいの言い方をしなければならない。蓄積された記録の山からどのような「歴史」を紡ぎだすかは重要な問題だ。特にそれが現在にきわめて近い場合には。

ブダペスト市街地にそびえる「恐怖の館」

ブダペスト市街地の大通りに面してHouse of Terror という博物館がある。ここにはナチスドイツのちにソ連の支配下にあった20世紀中葉のハンガリーで行なわれた恐怖政治時代の記録やモノ資料が展示され、当時の犠牲者の顔写真がフロアの壁面いっぱいに敷き詰められている。ビデオルームでは当時の記録フィルムだけでなく恐怖政治を生き延びた犠牲者や犠牲者の親族へのインタビューフィルムも流されている。

「鉛の時代」というドイツ映画がある。舞台は戦後のドイツ。その中に、小学生時代のヒロインがナチスドイツの残虐さを記録したフィルムを学校で見せられ、気分が悪くなって途中で退出してしまうというシーンがある。映画は「我々が彼らにこれをした」ことを子どもたちに擦りこむ効果をフィルムが発揮したことを示唆するが「恐怖の館」のインタビューフィルムは「我々にこれをしたのは我々自身である」ことを見る者に伝えるものだとも見なしうる。詳細を知るには至らなかったが、別の日にこれを見ていたアメリカの報告チームメンバーとの間でも、強いそのインパクトがセッション後に話題となった。

おわりに

アーカイブズは、それ自体で社会学にとって非常に興味深いものであり、アプローチの仕方は多様であることなど様々な知見を得られた点、そして何よりもこの領域で研究を共同してやっていける仲間を海外に得られた点など今回の世界大会参加では大きな収穫を得ることができた。ひきつづき国内外の関係者と協力しつつ研究を進めていきたいと思う。

付記

セッションのより詳細な情報については下記サイトをご覧いただきたい。

http://homepage3.nifty.com/fjosh/Budapest2007.htm

なお、ハンガリーでの世界会議参加では日本学術振興会の国際学会等派遣事業（第Ⅰ期）から渡航費等の助成を得た。セッションでの日本チームの報告は、科学研究費補助金「オーストラリアと日本の自治体における業務記録管理システムの比較研究」（2006-2008年度、課題番号18330117、研究代表者：藤吉圭二）の成果の一部を公開するものである。また、そもそも筆者がVERSの調査を通じてアーカイブズへの関心を深めるようになったのは、科学研究費補助金「歴史情報資源活用システムと国際的アーカイブズネットワークの基盤構築に向けての研究」（2003-2006年度、課題番号15202015、研究代表者：学習院大学・高埜利彦教授）への参加が契機となった。今回の訪問先NAHでは館のアーキビストあるサボ・ドロッチャ氏に大変お世話になった。いずれも記して謝意を表したい。